大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

ドストエフスキーの土壌主義と汎スラブ主義

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 俊治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006234

ドストエフスキーの土壌主義と汎スラブ主義

萩　原　俊　治

はじめに

いま「イデオロギー」という言葉を、ある世界観ないしは意識形態というように広い意味で捉えることにすれば、バフチンが言うように、ドストエフスキーの小説、特にシベリア流刑以降に書かれた長篇小説が脱イデオロギー的なポリフォニー小説であることは明らかだ。もちろん「脱イデオロギー的」と言っても、そこにイデオロギーがないというのではなく、逆に、私たちが生きている世界に無数のイデオロギー（バフチンの言葉では「声」）があるように、ドストエフスキーのポリフォニー小説においても無数のイデオロギーが林立しているということだ。それは架空の小説世界ではあるが、私たちが生きている世界に酷似したもうひとつの世界なのである。このような世界ではひとつのイデオロギー、ひとつの観点、ひとつの「声」が世界を支配するという事態はあり得ない。あるイデオロギーはたちまち別のイデオロギーと対話を始め、その別のイデオロギーによって相対化されてしまう。

バフチンのポリフォニー論から大きな影響を受けているA．ボイス＝ギブソンによれば、ドストエフスキーのこのような小説技法は、この世に林立するさまざまなイデオロギーを包みこむ、深いキリスト教信仰を彼が持っているからだ。キリスト教徒としてボイス＝ギブソンは次のようにいう。

「バフチンが述べているような、この芸術家のポリフォニックななにものにも縛られない態度こそ、実は本人が思っているよりははるかにキリスト教的なものなのである。あらゆる種類の人間の立場に自分をおいてみること、それがキリスト教徒たるものの本分である」[1]。

しかし、ドストエフスキーの作品を少し注意深く読んでみれば、バフチンやボイス＝ギブソンが事態を誇張してとらえていることが明らかになるだろう。ドストエフスキーはその小説のあらゆる場面において脱イデオロギー的であることはできなかったし、小説の中で「あらゆる種類の人間の立場」に自分を置いているわけでもない。

例えば、バフチンはドストエフスキーの処女作である『貧しき人々』もポリフォニー小説であるかのように述べているが、私がすでに論じたように、これは明らかにイデオロギー性の強いモノローグ小説である[2]。一方、シベリア流刑以降に書かれた長篇小説がすべてポリフォニックなものであることはバフチンが言う通りだ。それにも拘わらず、その多くの場面で明らかにパターン化されたモノローグ的な人物が登場する。たとえば、バフチンがもっともポリフォニックであるという『カラマーゾフの兄弟』に限ってみても、そこにはミーチャを弄んだサムソーノフという意地の悪い老人、傲慢そのもののミウーソフ、ゾシマに激しい敵対心をいだいているフェラポント神父などがモノローグ的な人物として登場する。また、小説の語り手によってユダヤ人の一群が、フョードル・カラマーゾフに守銭奴風の生活態度をもたらした人々である

かのように一方的な非難を受けたままになっているし、トルコ人やカトリック教徒、プロテスタントなどが、残酷な或いは愚かな人々としてイワンに非難され、これも他の登場人物の「声」による反駁を受けないでモノローグ的にパターン化されたままになっている。要するに、『カラマーゾフの兄弟』は全体としては無論ポリフォニックなものだが、そのディテールに多くのモノローグ的なものを含むのである。このような事態は彼の他の長篇小説にも当てはまる。

何故このような事態が生じているのか。これまでの拙稿の内容を反復すれば、それは作者の経験がその作品において反復－変容されているからだ。急いで付け加えなければならないが、ここで経験というのは、現在の自己とは無縁なものとなってしまった過去の経験ではなく、現在において立ち現れ、現在に働きかける過去の経験だ。要するに、それは過去の経験ではあるが、作者の現在を形作っている経験なのである[3]。

ドストエフスキーにおいて生じているのもこのような事態だ。即ち、ドストエフスキーのポリフォニー小説にモノローグ的な要素が混じっているのは、彼の経験の中に、あらゆる種類の人間の立場に身を置こうという経験と、そのような経験を否定しようとする経験が溶け合わないまま共存しているからだ。

言うまでもないことだが、私はドストエフスキーその人の経験を論じようというのであり、例えば　B．クズネツォフのように、ドストエフスキーを「思想家ドストエフスキー」と「芸術家ドストエフスキー」に分離するつもりはない。クズネツォフは次のようにいう。

「我々の関心の相手は思想家ドストエフスキーではなく、また彼が自分の正教擁護の代弁者として利用している登場人物たちでもない。我々の興味は芸術家ドストエフスキーであり、彼の疑惑と疑念、それに道徳的調和にたいする彼の熱望を表明する人物たち、である」[4]。

しかし、バフチンが「芸術と責任」という論文で述べているように、芸術家の生活と彼の創り出す作品は、互いに切り離すことのできない有機的全体である[5]。思想家としてのドストエフスキーと芸術家としてのドストエフスキーにしても同様だろう。それらはドストエフスキーという人格において統合されている有機的全体であり、決して切り離すことのできないものである。もっとも、ドストエフスキーは小説家としては熟練してはいるが、思想家としてはそうではない。このため、彼の論文は読み易いとはいえないし、小説に比べると大きく見劣りする。それにも拘わらず、芸術家としてのドストエフスキーと思想家としての彼を切り離すことはできない。従って、クズネツォフのドストエフスキー論には傾聴に値するところが多くあるにも拘わらず、そのドストエフスキーに対するアプローチの仕方は根本的に誤ったものである。

ところで話をもとに戻すと、ドストエフスキーにおいて優位な経験とは、言うまでもなくあらゆる種類の人間の立場に身を置こうという経験であり、それをバフチンはポリフォニックなもの、ボイス＝ギブソンはキリスト教的なものと呼び、私は中心気質的なものと呼んだ[6]。

では、そのポリフォニックな経験を否定しようとする経験を何と呼べばよいのか。意外に思われるかもしれないが、それもまたドストエフスキーにおけるポリフォニックな経験なのである。私見によればドストエフスキーは、ボイス＝ギブソンが言うような「なにものにも縛られない」立場に立っているわけではない。以下の論稿では、このドストエフスキーのポリフォニックな経験と深いつながりをもつ彼の「土壌主義」について論じながら、「ポリフォニックな経

験を否定するポリフォニックな経験」について述べてゆこう。

土壌主義

それでは、ドストエフスキーの土壌主義とはどのようなものなのか。それは一般には余り知られていない事柄でもあるし、詳しく説明する紙数もないので、ここはまず教科書風にソ連で1987年に刊行された『文学百科』の土壌主義の項目を訳しておこう。

【土壌主義】　ロシアの文芸批評と文化全般におよぶ思想潮流。十九世紀五十年代に始まった。クリミア戦争後、ロシア独自の発展を模索しようとしたもので、農奴制を「悪夢のような過去」として、また、西欧のブルジョア民主主義を「ブルジョアのペスト」として否定した。スラブ主義や西欧主義の一面性を克服しようとした思想潮流であり、雑誌『モスクヴィチャーニン（モスクワっ子)』のいわゆる「若き編集者」（アポロン・グリゴーリエフなど ── 萩原）の考えが、その源となっている。注目しなければならないのは、この思潮を担ったのが、ドストエフスキー兄弟の発行していた雑誌『時代』と『世紀』のまわりに集まった雑階級のインテリ達だったということである。土壌主義のイデオローグおよび宣伝者は（それぞれの考え方は若干異なっていたが）フョードル・ドストエフスキー、アポロン・グリゴーリエフ、ストラーホフの三人だった。ドストエフスキーは「知識階級」の人々が民衆から離反していると指摘しながら、教養の担い手たちは「民衆の生きる土壌」と合流しなければならないし、その主要素である「民衆におけるキリスト教的な結びつき」を受け入れなければならないと説いた。スラブ主義との共通点としては、ロシア民族の宗教的精神的基盤、特に族長制をとる農民社会（アポロン・グリゴーリエフは、商人階級も含める）を強調したことと、唯物論や革命に対して否定的な態度を取ったことが挙げられる。[7]

このように教科書風にいえば、一応、ドストエフスキーとアポロン・グリゴーリエフ、さらにストラーホフは、すべて「土壌主義者」としてひと括りにされるが、『文学百科』にもあるように、彼らの考え方が異なっていたことも明らかだ。その異同について論じるのは別の機会に委ねることとし、今はドストエフスキーの土壌主義について述べてゆこう。

ドストエフスキーの信仰

『文学百科』でも述べられていたように、土壌主義とキリスト教信仰は切り離すことができない。そこで、ドストエフスキーのキリスト教信仰の歴史を簡単に振り返ってみる。

ドストエフスキーの母親は富裕な商人の娘であり、当時の商人階級の人々がそうであったように、彼の母親もきわめて信仰心の篤い女性だった。この母親の強い影響を受けながら育ったドストエフスキーがキリスト教から離れてゆくのは、彼の処女作『貧しき人々』を絶賛した批評家ベリンスキーに出会ってからだ。無神論者であるベリンスキーから大きな影響を受けたドストエフスキーは、キリスト教徒としてのアイデンティティを失いそうになり、激しい葛藤に悩まされるようになる。のちにドストエフスキーは徒刑地から、兄のミハイルに次のように書く。「しかし、どうか、私がペテルブルグにいた最後の数年間のように、ふさぎの虫に取りつかれた疑り深い人間のままだなどと思わないでください」[8]。神経を病んでいたドストエフスキーを癒したのは、皮肉にも死刑宣告とそのあとに続くシベリア流刑という辛い体験だった。目新しい事柄ではないが本稿では必要な部分なので、少し詳しくその経緯をたどっておこう。

二十七歳のドストエフスキーは、1949年4月、ペトラシェフスキー事件に連座し逮捕される。彼の罪状はペトラシェフスキー会で禁書扱いのベリンスキーのゴーゴリ宛ての手紙を朗読したというものだった。このベリンスキーの手紙はやはり無神論の色彩の濃いものであり、当時の農奴制やロシア正教会に対する批判がゴーゴリ批判という形で述べられていた。同じ年の12月22日、ドストエフスキーたちはセミョーノフスキー練兵場に引き出され、いきなり銃殺刑を言い渡される。思いがけない宣告に呆然となった被告たちの前で、まず第一列の三人の被告が処刑されようとする。ドストエフスキーは第二列にいた。そのとき、これもいきなり特赦の勅書が読み上げられ、銃殺刑は即座に中止となる。これは皇帝政府があらかじめ描いていたシナリオだった。第一列の被告の一人、グリゴーリエフという男は発狂する。この直後、彼は兄のミハイルに次のような手紙を書く。

「兄さん、なつかしきわが友！　すべてが決まりました！　私は要塞監獄（オレンブルグのようです）で四年間の懲役に服したのち、一兵卒として勤務することになりました。（中略）兄さん、私はふさぎこんでもいないし、打ちのめされてもいません。どこにいても生きることができます。生命は私たち自身の中にあり、外にはないのですから。私の回りにも人はいます。彼らの中にいて『人間』でいること、ずっと『人間』でいること、どんなに不幸なときもふさぎこんだり、打ちのめされたりしないこと、これが生きるということです。そうでなくては生きている値打ちはありません。そのことが私には分かりました。私の血と肉になりました。本当です！　これまで高邁な芸術的生活を送りながら創造していた私の頭、これまで精神の崇高な要求に従って働いていた私の頭、それはもう切り落とされました。それでも過去の記憶と、書かれる直前に放り出されたままになっているイメージの群が私には残っています。このため私はずいぶん苦しむでしょう！　しかし、私には心と、以前と同じ血と肉が残っています。私は愛したり、苦しんだり、望んだり、記憶したりできるわけです。これがともかくも生きるということなのです！　On voit le soleil!（至るところに太陽はあるのです！）」[9]

「私のことを悪く思っている人、私と口論したことがある人、私が不快な印象を与えた人に出会ったら、どうか彼らにそのことは忘れるように　言ってください。私の魂には憤りも悪意もありません。いま、この瞬間、これまでに知り合った人たちの誰彼をつかまえて抱擁し、愛したい気持ちで一杯です。これは喜びです。きょう、死を目の前にひかえ、懐かしい人々に別れの挨拶を言っていたとき、その喜びを私は味わいました。」[10]

ドストエフスキーがこの日、激しい回心体験を味わったことは明らかだ。こののち彼がこの回心体験を忘れることはない。それは形を変えて『罪と罰』のラスコーリニコフや『カラマーゾフの兄弟』のアリョーシャの回心体験して描かれ、また、この手紙とほとんど同じ言葉で『カラマーゾフの兄弟』のマルケルの回心体験として描かれることになる。要するに、銃殺刑直前にあったドストエフスキーは、それまで自己を無神論へと駆り立ててきた肥大した自尊心に気づくとともに、それを放棄し、これまで共に同じ時間の中を生きてきた人々と和解しようとする[11]。このようにして彼は再び信仰を取り戻す。後でも述べるように、このような全ての隣人を抱擁しようという回心体験がドストエフスキーのポリフォニックな世界観と土壌主義の基盤となる。

民衆の時空間

しかし、この全ての隣人を抱擁しようというドストエフスキーの熱狂的な決意は、まもなく冷水を浴びせかけられる。オレンブルグではなくオムスクの監獄に収用されたドストエフスキーは、四年後の1854年二月、兄ミハイルに宛てて次のように書く。

「徒刑囚たちとはすでにトボリスクで知り合いになっていたのですが、ここオムスクで彼らと共に四年間暮らさなければなりませんでした。これは苛立ってばかりいる、粗野で悪意に満ちた連中です。彼らの貴族に対する憎しみは限度を超えています。このため、私たちは憎しみをこめて彼らに迎えられ、私たちの不幸に彼らは意地の悪い喜びを覚えたのです。私たちを彼らの思うままにさせておいたら、私たちは食べられていたでしょう。ともかく考えてもみてください、自分の身を守ろうとしても、このような連中と何年間も一緒に暮しながら飲んだり食べたり眠ったりしていて、どうしてそんなことができましょう。ありとあらゆる侮辱の言葉を吐きかけられても、嘆いている暇さえないのですから。『お前たち貴族は、鉄のくちばしで俺たちをつついてきた。これまでは御主人様として人民を苦しめてきたが、今じゃ人民以下だ。俺たちの兄弟というわけだ』、これが四年間のあいだ幅をきかせたテーマです。百五十人の敵は飽きることなく私たちに付きまとい、いじめました。これが彼らには気に入っていたのであり、娯楽であり暇潰しでした。このような災いから逃れる方法があったとすれば、それは、無関心を装い、彼らより私たちの方が精神的には上だということ（彼らもそれは認めざるを得なかったし、それを大切なことだと思ってもいたのです）、そして、彼らの言うがままにはならないということを示すほかはなかったのです。彼らはいつも、私たちの方が彼らより上だということは分かっていました。彼らは私たちが犯した罪について何も分からなかったのですが。」[12]

ドストエフスキーはこのあと続けて、囚人たちは「まるで樽詰めのニシンのように」ひとつの部屋に詰め込まれ、「豚」のような生活を送っていたと述べる。このような生活の中で、ドストエフスキーは自分の肥大した自尊心を放棄するだけでは生きてゆくことはできなかった。父の代からの成り上がり貴族とはいえ、ともかくも貴族階級に属していた彼が農奴や平民出身の犯罪者たちとともに暮してゆくためには、さらに貴族としての自尊心を放棄しなければならなかった。こうして彼には民衆が理解できるようになる。同じ手紙で彼は次のようにいう。

「とはいうものの、人間はどこでも同じです。その監獄でも強盗たちのあいだに四年間いて、ついに人間が見分けられるようになりました。信じてもらえるでしょうか、深みのある性格の者もいれば、つよい性格や素晴らしい性格を持った者もいます。粗野な風貌の下に黄金を見つけるのはとても楽しいことでした。それも一人や二人ではなく、何人もいたのです。尊敬せざるを得ない者もいましたし、本当に素晴らしい者もいました。（中略）懲役生活でじつに多くの民衆のタイプや性格を学びました。寝食をともにしたおかげで、かなり彼らのことが分かったように思います。浮浪者や強盗たちの物語や、ありとあらゆる陰鬱で胸もつぶれるような暮らしぶりについて、どれだけ物語を聞いたことでしょう！　何巻もの書物になるほどです。何という驚くべき人々でしょう。私は時間を無駄にしたとは言えないのです。ロシアを知ったとはいえないまでも、ロシアの民衆がよく分かりました。おそらく、私ほど知っているものはそう多くはないと思います。でも、これは私のつまらぬ自惚れでしょうね！許してください。」[13]

以上の事態を後年ドストエフスキーが書いた『作家の日記』の言葉を借りて要約すれば、彼は「民衆のもっとも低い段階の者たち」と自分を等しい者と見ることができるようになって初めて民衆を理解できるようになったということである[14]。しかし、彼がこれも同じ『作家の日記』で述べているように、貴族の政治犯たちすべてが彼のように民衆を理解できるようになったわけではない。『死の家の記録』にも描かれているように、貴族たちの多くは監獄で寝起きを共にするようになっても民衆を理解できない。従って、何故ドストエフスキーには民衆を理解することが可能であったのかということについて述べておく必要がある。

ドストエフスキーの性格

シベリア流刑になる以前からドストエフスキーが治療を受けていた医者であり親友でもあったヤノフスキーは次のようにいう[15]。

「ドストエフスキーは自分よりほんの少し貧しい者に有り金のほとんどを与えていたし、時には、ドストエフスキー自身より貧しいとは言えないのに、ただただ彼の底抜けのお人よしを利用して金をかすめ取ろうとしている輩にまで金を与えることがあった」。

「ドストエフスキーは隣人を愛したが、あんな風に愛せるのは深い信仰を持っている者だけだ。底抜けに善良で、私の人生で彼ほど他人の気持ちが分かる人間に会ったことがない」。

また、ドストエフスキーは或る手紙の中で次のように述べる。

「私は恐ろしく生活に馴染みやすいので、自分を取り巻いているものとすぐ一体化してしまい、後でそれから身をもぎ離すとき痛みを感じるのです」[16]。

すでに別のところで述べたように、このように他人に対してわけへだてなく共感できると同時に、新しい環境に容易に慣れることができるのは「中心気質者」だけである[17]。中心気質という概念は広く知られているとは言い難いので、簡単に私見を反復しておこう。

中心気質という概念を提唱したのは精神医学者の安永浩であり、彼によればこの気質はこれまで「類てんかん気質」と呼ばれてきた気質だけではなく、分裂気質とも循環気質ともいえない正常者のかなりの部分を包含するものである[18]。この気質の基本的なイメージは、安永によれば「コドモ」に対して私たちが抱くイメージであり、その二大特徴は、これも精神医学者の木村敏によれば「防御機構の弱さ」（自分を余り守らない）と「現在中心的な時間性」（今に生きる）である[19]。また、安永によれば気質とは「より生物学的に、体質、遺伝的に規定された基本特性」であり、性格とは、その気質に「環境や経験が加わって形成された、細部の価値観内容まで含んだ全体結果」である。すなわち、気質とは性格の基盤となる「比較的コンスタント」なものだ。

一方、気質については触れないで性格について論じている社会学者の作田啓一によれば、人間の性格は次の三つの価値観によって形成される。すなわち、有用志向あるいは防衛志向、原則志向、共感志向。作田によれば、この三つの価値観はどれひとつを欠いても生きてゆくことが困難になるので、優位劣位の差はあるとしても誰もがこの三つの価値観を持っている[20]。

さて、気質は性格の基盤となるものであるという安永の仮説を採用すれば、このような作田の性格論を安永、木村両者の気質論と結びつけることができる。要するに、安永、木村両者の気質論をベースとし、そこに作田の性格論を加えた気質－性格論である。私見を詳しく反復す

る余裕はないが、その気質ー性格論の概略は次のようなものである。まず、有用志向あるいは防衛志向は循環気質者にもっともふさわしい価値観であり、共同体志向と言い換えることができる。また、この志向が優位の人々は自らの過去に強い執着をもつ。次に、原則志向は分裂気質の人々にもっともなじみやすい価値観であり、彼らは共同体において、孤立することを恐れず自己を向上させようとする。また、彼らは未来の中に生きようとする傾向が強い。最後に共感志向は、ドストエフスキーのようなてんかん者をも含む中心気質者にもっともふさわしい価値観であり、彼らは過去や未来に思い煩うことなく、幼子のように現在を生きることができる。

作田がドストエフスキーに対して行っている性格判定に私見を加えた結果をいうと、もちろんドストエフスキーの性格のベースとなるものは中心気質であるが、その中心気質による共感志向が、強い原則志向によって引き上げられているということになる。この結論は、ドストエフスキーのポリフォニー小説を分析することによって得られたものである。

「防御機構の弱さ」と「現在中心的な時間性」という性格特性を持っていた中心気質者ドストエフスキーが、監獄という新しい時空間とそこに住む囚人たちに、容易に（といっても、『死の家の記録』の叙述が正しいとすれば「二年」かかって）なじむことができたのは当然だろう。中心気質者として人並み外れた共感能力を持っていたため、ドストエフスキーは貴族であったのにも拘わらず、農奴や平民からなる囚人たちの信頼を獲得し、彼らの身上話を聞くこともできた。これは同時にドストエフスキーが囚人たちの生きていた時空間、すなわち、素朴なキリスト教信仰を抱いていた農奴や平民たちが生きていた時空間に同化しながら生きたということをも意味する。

ところで、信仰心の篤い両親の家での生活はともかく、回心以前の彼がそれまで生きてきた時空間は、当時のロシアの知識人や貴族たちが生きていた時空間だった。ひとことで言えば、それは当時の西欧文化の影響の濃い、いわば人間中心主義的な時空間であった。人並み外れた共感能力を持っていたドストエフスキーが両親の家のある古都モスクワから人工都市ペテルブルグに来た結果、その都市の持つ西欧的な時空間に激しく引きつけられてゆき、ついには西欧派知識人の集まりであったペトラシェフスキー会の中でも最も無神論的なドゥーロフ・グループの一員になっていったのは特に驚くべきことではない。一方、このドストエフスキーが流刑のため、やはりその人並み外れた共感能力によって、民衆の生きる非西欧的で、いわば神中心主義的な時空間に激しく引きつけられ同化してゆくのである。ここには中心気質者特有の行動様式が顕著に現れていると言えるだろう。また、このような行動様式を持っていたため、彼はポリフォニックな世界観と土壌主義を獲得してゆくのである。

ドストエフスキーの土壌主義

さて、十年ほどのシベリア流刑ののち、ペテルブルグに帰還したドストエフスキーは、兄とともに創刊した雑誌『時代』で「土壌主義宣言」を唱えることになる。しかし、表面的にいえば、ここにドストエフスキーに独自なものは殆どない。知識人は民衆と結びつかなければならないという主張、さらに「土壌」という言葉さえも、スラブ派であったコンスタンチン・アクサーコフがすでに十年以上も前に述べていたものであった。また、文壇におけるボス政治を廃すべきだという主張は西欧派の人々が以前から唱えていたものであったし、ピョートル大帝に

よって始められた欧化政策は最終段階に達しているので、ロシアはこれから独自の道をたどるべきだという主張も、すでに西欧派のベリンスキーが唱えていたものである。このように、ドストエフスキーが「土壌主義宣言」で唱えた土壌主義は、自分の気に入った考えを寄せ集めたものにすぎなかった。しかし、ドストエフスキー自身はもちろん認識していなかっただろうが、このような寄せ集めであったところに土壌主義の独自性があった。説明しよう。

ドストエフスキーは「土壌主義宣言」ののち、シベリアで獲得した自分の経験を手がかりにしながら、スラブ派や西欧派、さらに文壇のボスたちという風に、党派を問わず、全面的な論争を繰り広げてゆくことになる。言い換えると、「ロシアを知ったとはいえないまでも、ロシアの民衆がよく分かりました。おそらく、私ほど知っているものはそう多くはないと思います」と、兄に手紙で語ったドストエフスキーは、西欧派をはじめとする知識人たちが民衆の本当の姿を知らないまま空理空論を弄んでいると批判しつづける。ドストエフスキーの土壌主義から寄せ集めの他人の思想を取り除けば、このロシアの民衆を「私ほど知っているものはそう多くはないと思います」という実感こそ唯一彼に固有のものだった。

そうではあるが、ドストエフスキーと様々な陣営とのあいだの論争が激しくなってゆくにつれて、ますます彼の唱える土壌主義が他人の思想の寄せ集めにすぎないことが明らかになってゆく。土壌主義とはもともと他人の思想の寄せ集めなのだから、ドストエフスキーが自分たちと西欧派あるいはスラブ派との違いを明確に述べることができなかったのは当然だ。これだけでもその論争が錯綜したものになる可能性は十分であるのに、ドストエフスキー特有の性格が事態を一層複雑なものにしてゆく。すなわち、彼は中心気質者特有の「防御機構の弱さ」と「現在中心的な時間性」をその論争においても発揮し、論敵の考えに巻き込まれ、先の見通しも立てないで論敵とのいま現在の「対話」に熱中してゆく。ドストエフスキー兄弟の雑誌が経営不振のために廃刊にならなかったとすれば、その論争は『地下室の手記』の主人公の意識のように限りなく混沌としたものになっていっただろう。

このような論争を仔細に検討してみたところで、ドストエフスキーの土壌主義が何であるかを特定することはできない。あえて特定しようとすれば、オスポヴァトのように「完結した、単一の意味をもつ政治イデオロギーを表すものではなく、未来に向けられたメッセージ」であるという風に言うしかない[21]。このオスポヴァトの言葉を言い換えると、結局ドストエフスキーの土壌主義というものは、その小説と同様、バフチンのいう「異言語混交（ヘテログロシア）」（すなわち、様々な「声」）によって成立しているものなのである。もっとも、小説においてドストエフスキーは、その様々な「声」をひとつの劇的な時空間に集約することによってポリフォニー小説を書くことができたが、土壌主義を標榜する論文においては、そのようなことはできず、結局、論文の読者に散漫な印象を与えるだけに終った。しかし、うまくゆかなかったとは言え、彼の土壌主義の独自性がポリフォニー小説と同様、異言語混交という事態にあることに変わりはない。

ポリフォニーの中のモノローグ性

ところで、このような土壌主義をドストエフスキーの思想と言うのにはいささか無理があるかもしれない。彼独自のシベリア経験を除けば、それは他人の思想の寄せ集めなのだから。し

かし、あえてそれを彼の経験の思想的な側面と呼ぶことにすれば、ポリフォニー小説はその芸術的な側面ということになるだろう。両者ともに、対話によって様々な時空間の中を生きている人々を結びつけようという、すなわち「全ての隣人を抱擁しよう」という試みなのである。しかし皮肉なことに、まさにこのポリフォニー性のために両者からモノローグ的な事態が発生することになる。

すでに述べたところから明らかなように、人並み外れた共感能力を持っていた中心気質者ドストエフスキーにとって、他者の生きている時空間を自らの意識から追い払い、自らの時空間に閉じこもって生きることはきわめて難しいことであった。彼にとって、生きるということは他者と濃密な対話を重ねながら、他者の時空間を共に生きることであった。しかし、いかに彼が共感能力に優れているといっても、親密な対話をすることができない人々に対してはコミュニケーションをとることができない。このような人々がポリフォニー小説の「対話」に参加しないまま、結果としてモノローグ的な印象を読者に与えることになる。この人々には三つのタイプがある。

ひとつは、きわめて弱い共感志向しか持っていない人々である。このような人々はさらに二つのタイプに分けることができる。すなわち、強い原則志向とそれより弱い有用志向（防衛志向）を持つ人々であり、その例としては『カラマーゾフの兄弟』のフェラポント神父などが挙げられる。もうひとつは、強い有用志向（防衛志向）とそれより弱い原則志向を持つ人々であり、その例としては『罪と罰』の浅薄な功利主義者ルージンなどが思い浮かぶ。

もうひとつのモノローグ的なタイプとは、ドストエフスキーから空間的、あるいは文化的に遠く離れているため、彼との対話が不可能になっている人々である。このような例としては、ロシアに住みながらも、異なった文化や習慣をもって生活している人々、すなわちユダヤ人やドイツ人などが挙げられるし、また、外国の異教徒、例えばポーランド人やトルコ人などが例として挙げられる。もっとも、このタイプの人々であっても、ドストエフスキーが共感できる人々であればモノローグ的な人物にはならない。例えば、『死の家の記録』に登場するユダヤ人のイサイ・フォミッチをモノローグ的な人物と言うことはできないだろう。

以上の事態は彼のポリフォニー小説だけではなく、評論や論争文でも観察される。例えば、紀行文である『冬に記す夏の印象』もドストエフスキーの論文と同様に異言語混交という性格を持っているが、そこでは十九世紀のパリという都市全体が、浅薄な功利主義者ルージンのようにモノローグ的に扱われている。

ドストエフスキーの汎スラブ主義

これまで見てきたように、シベリア流刑以降のドストエフスキーの小説や評論は、モノローグ的な要素を含みながらも、基本的には異言語混交を基盤とするポリフォニックなものであった。しかし、このような事態が七十年代の始めを境にして大きく変化する。すなわち、ポリフォニー小説にモノローグ的な要素が不可避的に出現する確率あるいは様態は以前とそう変わらないが、彼の評論『作家の日記』では、土壌主義を土壌主義たらしめていた異言語混交が後景に退き、その代わりに、他のイデオロギーを圧する形で排外主義的な、汎スラブ主義的と言ってもよいイデオロギーが前面に躍り出てくる。このような事態を招いた下地となっているのは、

『冬に記す夏の印象』で述べられているような彼のヨーロッパ文明に対する深い失望である。しかし、それ以外にも次のような理由が考えられる[22]。

まず、ドストエフスキーが当時、個人的に或いは著作の上で親しんでいたアポロン・マイコフやイワン・アクサーコフ、さらにダニレフスキーといった国粋的なスラブ派の人々の影響を受けていたということが理由のひとつとして挙げられる[23]。

次の理由として、当時、権力者への階段を登ってゆく過程にあったポペドノースツェフとドストエフスキーが親しく交わっていたということが挙げられる。ちなみに、ポペドノースツェフとは当時、後にアレクサンドル三世となる皇太子の教育係をしていた人物であり、後にそのアレクサンドル三世とその息子のニコライ二世の反動的な政策を推進することになる。彼はまた反ユダヤ主義者としても悪名の高い人物であり、その持論は、ロシアのユダヤ人の三分の一は殺し、三分の一は移民させ、残りはロシア正教に改宗させるべきであるというものだった[24]。彼のこの持論は二十世紀初頭、ロシア各地のポグロム（ユダヤ人虐殺）となって実現されることになる。ドストエフスキーは七十年代以降晩年に至るまで、自分の作品に深い理解を示してくれたこの人物と親交を結んでいるが、ポペドノースツェフがそのような悪行を行うことになるのはドストエフスキーの死後である。

最後の理由として挙げられるのは、当時のロシア国内にみなぎっていた好戦的な気分だろう。ドストエフスキーがその気分に感染していたことは、露土戦争をめぐって反復される彼の余りにも翼賛的な発言に明らかだ。

さて、以上の理由のために晩年のドストエフスキーが汎スラブ主義的イデオロギーに心を奪われていったのは確かだとしても、そのようになった最大の理由はドストエフスキー自身にあると見るべきだろう。すなわち、ヨーロッパ文明に対する強い失望感があったとしても、周囲の好戦的な気分に感染せず、ポペドノースツェフやスラブ主義者の友人たちに同調しなければ、ドストエフスキーは以前と同様の穏健な愛国者にとどまっていたはずだ。そうはならなかったのは、彼が典型的な中心気質者であったからだ。言い換えると、彼の「防御機構の弱さ」が汎スラブ主義的なイデオロギーの受容を容易にしているのである。

そうではあるが、『作家の日記』でのドストエフスキーの汎スラブ主義的、愛国的なモノローグを過大に評価し、晩年の彼がポリフォニックな世界観を放棄していると見なすことはできない。彼のポリフォニックな世界観はこの時期に書かれた小説、例えば『カラマーゾフの兄弟』に明らかだし、また、評論でも、例えば『作家の日記』1877年３月号の「ユダヤ人問題」をめぐって書かれた一連の評論には、彼の土壌主義に見られた異言語混交がきわめて明瞭に現れている。従って、ドストエフスキー晩年の汎スラブ主義的なモノローグは、中心気質者たる彼がその豊かな共感能力のために、自分の生きている時空間に余りにも密着してしまった結果と言えるだろう。もう一度ドストエフスキー自身の言葉を引用しておこう。「私は恐ろしく生活に馴染みやすいので、自分を取り巻いているものとすぐ一体化してしまい、後でそれから身をもぎ離すとき痛みを感じるのです」。

注

1）A．ボイス＝ギブソン、『ドストエフスキーの信仰』、小沼文彦、広瀬良一訳、ヨルダン社、1979, p.133.

2）拙稿『<貧しき人々>と隠された欲望』（むうざ、8号　1989年）

3）詳しくは、拙稿『誰がドストエフスキーを読むのか』、大阪経大論集、第45巻第4号、1994。

4）B．クズネツォフ、『アインシュタインとドストエフスキー』、小箕俊介訳、れんが書房新社、1985, p.57.

5）M.M. Бахтин, Литературно-Критические Статьи, M, 1986, c. 3-4.

6）拙稿、前掲書。

7）Литературный Энциклопедический Словарь, M., 1987, c. 292-3.

8）Ф.M.Достоевский, Полное собрание сочинений в тридцати томах, т. 28-1, Л., 1985, c. 180.

9）Там же. c. 162.

10）Там же. c. 163-4.

11）自己放棄と回心については、W. ジェイムズ『宗教的経験の諸相（上）』、舟田啓三郎訳、岩波文庫、1969, p.316.

12）Достоевский, там же. c. 169-70.

13）Достоевский, там же. c. 172-3.

14）Достоевский, т. 21, c. 134.

15）Ф.M.Достоевский в воспоминаниях современников, т. 1, M., 1964.

16）Ф.M.Достоевский, т. 28-1, c. 177.

17）拙稿『誰がドストエフスキーを読むのか』

18）安永浩「『中心気質』という概念について」（『てんかんの人間学』木村敏編所収、東京大学出版会、1980, p.22)。

19）拙稿『誰がドストエフスキーを読むのか』

20）作田啓一『生成の社会学をめざして── 価値観と性格』、有斐閣、1993。

21）A.Л.Осповат, Заметки о почвенничестве; Достоевский ── материалы и исследования, т. 4, Л., 1980, c. 172.

22）次の文献を参考にした。David I. Goldstein, Dostoevsky and Jews, University of Texas Press, 1981, pp.90-9.

23）詳しくは、勝田吉太郎『近代ロシア政治思想史』、創文社、1977（三刷)、第十二章以降。

24）Louis Greenberg, The Jews in Russia, N.Y., 1976, vol.2, p.48.